

バレス『デラシネ』におけるユゴーの葬儀

田中琢三

はじめに

モーリス・バレス (Maurice Barrès, 1862-1923) の三部作『国民的エネルギーの小説』*Le Roman de l'énergie nationale* (1897-1902) の第1巻として1897年に刊行された『デラシネ』*Les Déracinés*¹⁾は、1880年代前半のバリを舞台に、ロレーヌ地方から上京した7人の若者が、都会の厳しい競争にさらされて挫折する姿を描いたリアリズム小説であり、第三共和政の共和主義教育を批判したイデオロギー色の強い「問題小説」(roman à thèse)でもある²⁾。『国民的エネルギーの小説』の特徴は、フィクションの物語がブーランジェ事件やパナマ事件など現実の政治的事件や社会的な出来事と密接に関連していることであり、『デラシネ』では1885年にパリで行われたヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) の国葬が小説のクライマックスとなっている。

この有名な場面は、ユゴーの葬儀が語られる際に同時代人の証言としてしばしば引用されるが、それを文学研究の観点から本格的に分析した論考はほとんど存在しない³⁾。本稿では、このユゴーの葬儀の場面が、物語においてどのような位置を占め、どのような意味を担っているのかを、葬儀に集まった群衆の描写、セレモニーの舞台となったパリの凱旋門とパンテオンという二つのモニュメントの表象、ユゴーと登場人物との関係など、さまざまな観点から検討することによって、一見教条主義的に見えながら、実際は多様な側面を有するバレスの小説世界の一端を明らかにしたい。

I.

『デラシネ』の分析に入る前に、ユゴーの葬儀の政治的・歴史的背景について簡単に説明しておきたい⁴⁾。まず指摘すべきは、この葬儀がフランス共和国に貢献した偉人をパリのパンテオンに埋葬する「パンテオン葬」(panthéonisation)であったことである。もともとパンテオンは18世紀後半にサント＝ジュヌヴィエーヴ教会として建設されたが、フランス革命期にパンテオン葬が始まり、共和国の偉人の墓所となった。しかし、その後、王政復古、七月王政、第二共和政、第二帝政の時代にはパンテオン葬は実施されず、第二共和政期以外はパンテオンそのものが本来の姿である教会に戻されていた⁵⁾。この施設を再び非宗教化して偉人の霊廟に戻す契機となったのが、国民的詩人であり、第三共和政の象徴的存在であったユゴーの死であった。重要な点は、このパンテオン葬の復活が、1870年代後半に王党派に勝利して議会の多数派になった穏健共和派の政治的戦略、つまりフランス革命の理念を制度化して共和政による国民の統合を目指すという政策の一環として実現されたことである。以下では、ユゴーの葬儀が具体的にどのような段取りで実施され、実際にどのようなセレモニーとなったのかを確認しておきたい。

ユゴーの遺体が収められた棺は、1885年5月31日の早朝に、数千人の群衆が見守るなかパリ中心部に

あるユゴーの自宅から出棺し、エトワール凱旋門まで運ばれた。遺体は凱旋門の真下に設けられた高さ22メートルの棺台の上に24時間安置され、そこで一般市民のための通夜が行われた。翌6月1日の朝10時半に葬儀が正式に開始されるが、まず文部大臣などおもに政治家による追悼演説が行われ、共和国の栄光と統合の象徴としてのユゴーが称えられた。そして11時半に凱旋門からパンテオンに向かって葬列が出発する。霊柩車そのものは生前のユゴーの意向に従って貧乏人の葬儀に使用される質素なものが用いられたが、葬列は事前に許可を得た1000以上の団体が参加した盛大なもので、沿道には少なく見積もっても100万人を超える群衆が詰めかけたとされる。霊柩車がパンテオンに着くと儀式が始まり、後から葬列の参加者が次々と到着するなかで、ルコント・ド・リール (Leconte de Lisle, 1818-1894) などおもに文学者による追悼演説が行われた。そして、この一大セレモニーは特に大きな混乱もなく夜の7時頃に終了した。

ユゴーのパンテオン葬はパリで行われた歴史上最も大規模なイベントのひとつとなったが、指摘すべきは、それが厳粛な儀式でありながら、ユゴーが象徴する共和国を称える祭典のような性格を帯びたことである。数多くの市民が参加したこの野外のセレモニーは、1890年の「連盟祭」(La Fête de la Fédération) に代表される革命期の祭典に似た側面もあった。実際に、パリ市民にとっては葬儀というよりもお祭り騒ぎに近く、演劇的なスペクタクルかつ商業的なイベントとなり、葬列が通過する沿道のアパルトマンでは見物客に部屋を貸したり、メダル、肖像写真などのユゴーの記念品が売られたりしたのである。

当時、新進気鋭のジャーナリストであり文芸評論家であった22才のバレスも、この歴史的なセレモニーを目撃した100万の群衆のうちの一人であった⁶⁾。以下では、その約10年後に書かれた小説『デラシネ』において、バレスがユゴーの葬儀をフィクションの物語にどのように組み込んでいるのかを検討していきたい。

II.

『デラシネ』は、ロレーヌ地方ナンシーのリセに哲学教師ポール・ブテイエが赴任する場面から始まる。カント主義に基づいた近代的なブテイエの思想に感化された主人公フランソワ・スチュレルら7人の生徒は、リセを卒業後、パリに転任したブテイエを追って上京していく。そこで彼らは共同で新聞を発行するが、やがて金銭的に行き詰まり、追いつめられたオノレ・ラカドーとアントワーヌ・ムシュフランが、アルメニア人女性アスチネ・アラヴィヤン (以下、アスチネ) を金品目的で殺害する。そしてムシュフランは罪を免れるものの、ラカドーは死刑となる。この小説は、先に述べたように第三共和政の教育を批判する「問題小説」であり、その教育の危険性を例証するための物語である。つまり、ブテイエによって行われた共和主義教育は、その普遍主義的な思想によって地方の特殊性や伝統を否定し、多種多様な国民を均質で抽象的な市民に還元するものであり、その影響を受けた若者たちが故郷の土地を捨て、社会的成功を求めて上京した結果、パリの厳しい現実と直面して挫折し、悲劇が起きるのである。そして、こうした作者の主張は、物語自体が例証するだけではなく、物語にしばしば介入するバルザック的な「語り手」によって読者に明確に伝えられている。

全20章から成るこの小説において、ユゴーのパンテオン葬が語られるのは「死体の社会的効果」(La Vertu sociale d'un cadavre) というタイトルが付された第18章である。この章の結末部において、無数の市民とともに葬儀の一部始終に立ち会った主人公スチュレルは、この群衆にフランスの一体性を見出し、自身はその一部にすぎないこと、人間の運命は自らが属する共同体によって決定されることを理解する。そして、この観点からムシュフランとラカドーの事件を総括し、生まれた土地から根こそぎにされ、

都会で根無し草になることの危険性を悟るのである。作品全体の教訓が示されたこのパッセージは「問題小説」としての『デラシネ』のクライマックスだといえる。

この小説では、ユゴーの危篤から葬儀までの経緯が新聞記事などを引用しながら生き生きと語られており、ルポルタージュとして興味深いものがあるが、注目すべきは、歴史的事実である現実のユゴーの死が、フィクションであるアスチネの死、つまりムシュフランとラカドーによって殺されるアスチネの悲惨な最期と対比されながら描かれていることである⁷⁾。

第16章で描かれるアスチネの殺害は、ユゴーの死の前日、つまり5月21日の夜にパリ郊外で起こった事件という設定になっている。この夜、現場近くの森を馬車で散策していたスチュレルは、4日前から新聞各紙で体調の悪化が伝えられていたユゴーについて同乗者と話をした直後に、アスチネと彼女の後をつけるムシュフランとラカドーの姿を目撃する。翌日の正午に発行された新聞には、ユゴーの危篤を知らせる記事の傍らにピヤンクールで身元不明の女性の遺体が発見されたという記事が掲載される。その記事を見て事態を察したスチュレルは、同日の夕方にパリの死体公示所に向かうが、その途中でユゴーの死を知らせる新聞の見出しを目にすることになる。5月26日には女性の遺体の身元が判明したことが新聞で報じられる。そして5月31日、つまりユゴーの遺体が凱旋門に移された日の朝に、スチュレルは新聞の売り子によってラカドーが殺人犯として逮捕されたことを知るのである。

このように小説では、アスチネの事件の進展とユゴーの危篤から葬儀までの経緯が同時並行的に語られている。ユゴーの死が語られる第17章は、「フランソワ・スチュレルの困惑」(Les Perplexités de François Sturel)というタイトルが付けられているように、仲間であるラカドーとムシュフランが犯した殺人の真相を明るみに出すかどうかを悩むスチュレルの葛藤、そしてアスチネとユゴーの死に直面した彼の心理的動揺が主たるテーマとなっている。

アスチネは、スチュレルの最初の愛人となったコンスタンティノーブル出身の美しいアルメニア人女性で、バレスのオリエントに対する夢を具現化した存在である⁸⁾。コスモポリタンでもある彼女は、サンクトペテルブルクからトビリシまでの旅行やコーカサスでの生活をスチュレルに話して聞かせる。こうしたオリエントの物語は、スチュレルの想像力を刺激し、彼をロマネスクで官能的な世界へと導いていく。スチュレルはアスチネから精神的に深い影響を受け、このアルメニア人女性との交流によって現実からしばしば夢の世界に逃避するという彼の性格が形成されることになる。

しかし、スチュレルは自らの性向に決定的な痕跡を残した女性の死よりも、ユゴーの死のほうに関心を向けようとする。なぜなら主人公にとって、この国民的詩人は「フランスの統一と友愛を維持するために必要不可欠だと思われる唯一の人間」(709)であり、また、アスチネの死はプライベートな不幸であるが、ユゴーの死は「民衆と精神的に一体化する機会」(710)となるからである。そしてこの「機会」がまさにユゴーのパンテオン葬にほかならないのである。

Ⅲ.

『デラシネ』の第18章において、ユゴーの葬儀は二つの場面に分けて記述されている。つまり1885年5月31日の夜に行われた凱旋門における通夜と、その翌日の凱旋門からパンテオンまで遺体を葬送する場面である。両者とも群衆の描写が非常に印象的であり、群衆はこの章のタイトルでもある「死体の社会的効果」を浮き彫りにするという意味で重要な存在であるが、それぞれの群衆の性格はかなり異なったものである⁹⁾。

5月31日の朝にユゴアの遺体が安置された凱旋門には、無数の群衆が「低い波」(les vagues basses) (726) のように押し寄せるが、それはまるで「巨人を制止しようとする小人たち」(726) のように見える。そして、夜になると高い棺台の上で眠るユゴアに対する群衆の畏敬の念が熱狂的なものになる。

夜の闇の中で、すでに棺は見えなくなり、高所で消えていた。人々の神経が戦慄した。それまではローマ帝国における神への賛美に似ていた崇拝が、オリエントの葬祭にみられるような激しい感情となった。[...] この精神的動揺の力で、そして日曜の終わりの自由な雰囲気の中で、人々の意識の底から何か混濁したものが浮かび上がってきた。[...] 死者のためのこの長い礼拝において、日曜から月曜にかけての夜は最高潮に達した時であり、国民に差し出された死体が神になる瞬間だった (729)。

このように、ユゴアの遺体に対する群衆の熱狂は、まさに神に対する崇拝そのものとなり、東洋の儀式のような異教的様相を帯びるに至るが、ここでもユゴアのイメージがオリエントの女性アスチネのイメージと重なっていることを指摘しておきたい。そして、「意識の底」から浮かび上がってきた「何か混濁したもの」とは無意識的な本能だと思われるが、それと呼応するかのように性的な衝動も呼び起こされる。

あらゆる死の崇拝がそうであるように、この葬儀も生の感覚を高揚させた。[...] シャンゼリゼ大通りのベンチやその木立の陰では夜明けまで途方もない放蕩が行われた。[...] おそらくこの大都市はユゴアを失ったことの埋め合わせをしようとしたのであろう。[...] この夜、どれだけの女性が愛人や外国人に身を任せたことだろうか。(728)

ロベール・ラフォン版の注にあるように、この通夜の夜に実際に「途方もない放蕩」が行われたことが他の文学者の証言によっても確認されているが¹⁰⁾、注目すべきは、エロスとタナトスの表裏一体の関係というこのテーマが、ユゴアの通夜と同様に夜の闇の中で行われたアスチネの殺害の場面にも見られることである。

この美しい死体、彼女が守り通したこの胸、まだ生々しい血の川で浸された生娘のようなこの胸、この愛らしい脚、生の本能を目覚めさせる非常な快樂を生み出すこれらすべてのもの [...]。(706)

また、この引用文中の「愛らしい脚」(les jambes adorables) の「愛らしい」という形容詞 *adorable* は、「礼拝に値する、あがめるべき」という意味もあり、このアルメニア人女性の死体がユゴアの死体と同様に崇拝の対象となりうることが示唆されていると思われる。

ユゴアの棺を前にした群衆の熱狂は、群衆の一人ひとりにさまざまな感情をもたらすが、その一方で「すべての人々に共通した状態」(728) を生じさせ、群衆を一体化させていく。

熱狂した人々、放蕩に耽る人々、馬鹿な人々、素朴な人々、善良な人々の驚くべき混交が、ただ一つの巨大な存在に編成されていく。葬儀用の松明に照らされて棺のほうに向いたその顔は、10万人の顔が集まったものである。卑しい表情をしている顔もあれば、恍惚とした表情をしている顔もあるが、すべての顔が感動している。(729)

この引用文にある「ただ一つの巨大な存在」は、直後に「無意識の怪物」(le monstre inconscient) (729) と言い換えられているが、これはパレスの小説『ベレニスの園』*Le Jardin de Bérénice* (1891) においてヒロインによって体現された民衆の「無意識」(inconscient) に相当するものであろう。この概念はエドゥアルド・フォン・ハルトマン (Eduard von Hartmann, 1842-1906) の哲学に由来するもので、個人ではなく集団の無意識であり、『ベレニスの園』では、民衆の本能と結びついた「創造的なエネルギー、世界の活力」(l'énergie créatrice, la sève du monde) (231) とされたものである¹¹⁾。

このように「無意識」の本能を共有することによって群衆は一体化していくが、それはユゴーの詩から喚起される神秘主義的なヴィジョンとも重なるものである。

彼 [ユゴー] はあらゆる存在とあらゆる事物の神秘、変化、連帯を復元してみせる。[...] 彼がその驚くべき言語の才能によって配置するところの言葉は、われわれ一人ひとりを自然全体に結びつける無数の見えない糸があることを感じさせる。(729)

こうしたイメージを想起しながら群衆の中を歩き続けたスチュレルは、個々の人間の生は「自然」(la nature) という全体から見ると微小なものであり、人々はこの超越的な「自然」によって運命づけられていることを悟る。

何百万もの人々が犠牲となり、地獄に落とされることさえもあるのは、ユゴーのいうように、自然がその深淵において何か偉大なことを行うからにほかならない。[...] われわれの役割とわれわれの隣人が果たす役割を受け入れよう。[...] われわれの人生や彼ら [同じ時代に生きる人々] の人生は、われわれが知り得ないもっと全体的な活動からすると一瞬にすぎないのだ。(730)

この「自然」は前述したハルトマンの哲学における「無意識」に対応するものと考えられるが、指摘すべきは、ここでは民衆のエネルギーを具現化するものとしての「無意識」ではなく、東洋的なニヒリズムに通じる運命論的、決定論的な世界の支配者としての「無意識」であることである。

そしてこの文脈において、これまで暗示されてきたユゴーの死とアスチネの死との深い結びつきが、はっきりと説明されることになる。

こうしてスチュレルは、ヴィクトル・ユゴーによって、アスチネによって導かれた結果と同じ結果に行き着いた [...]。スチュレルの本質的な部分はアスチネそのものであり、それが取り返しのでない状況を受け入れるために、「運命」という美しい言葉を甘受せよとスチュレルに促していた。ユゴーはアスチネを是認するために来たのだ。(730)

ここで主人公が到達した「結果」とは、「自然」の摂理という巨視的な観点からみると、アスチネが殺されたのは「運命」(fatalité) であり、不可避なことであるのでそれを受容するしかないという結論である。夜の凱旋門でスチュレルをその結論に導いたのは、熱狂の中で一体化していく群衆のイメージであり、万物の連関を想起させるユゴーの詩のヴィジョンであった。

IV.

以上のように、凱旋門の場面では、群衆の異教的な崇拝と本能的な熱狂がダイナミックに描かれているが、それに対して、その翌日の凱旋門からパンテオンまでユゴーの遺体を葬送する場面では、アナーキーな群衆ではなく、整然と秩序立って行進する群衆が登場している。

指摘すべきは、この葬列がユゴーを媒介にしてフランス共和国の一体性を体現するものとして描かれていることである。葬列には「政治家、アカデミー会員、文学者、あらゆるジャンルの芸術家、実業家、商人、労働者」(735)といった多様な職種の団体が参加するのだが、「祖国の利益」という共通の動機をもつ彼らは、次第にまとまりのある集団になっていく。

この巨大な無秩序は少しづつ組織化されていき、次のような国家の高尚な思想を表わすものになった。「ユゴーはいなくなるわけではない。彼はフランスの思想の貯蔵庫の一部となるだろう。」

[...] シャンゼリゼ大通りの端から端まで、とてつもなく巨大な運動、嵐のような風が生じた。質素な霊柩車の後に、数々の花輪、国家の気取った権力者たちが続き、そして、そのうしろに、傲慢で無邪気、感動的で滑稽な国家、理想に役立つことを確信する国家それ自体が歩いていた。このようにして、歩道から屋根までテーブルや梯子や足場の上に積み重なった人々から成る巨大な堤防の間を、われらがフランスの川は流れていた。(735-736)

引用文中の「国家」(la Nation)は、「国民」と訳すことも可能であるが、ここでは大文字で始まっており、フランスという国家が擬人化されていると解釈すべきであろう。そして重要な点は、沿道につめかけた無数の市民よりも、ユゴーの遺骸をパンテオンに運ぶ葬列の方が群衆としてクローズアップされていることである。

「われらがフランスの川」(notre fleuve français) (736) や「組織化されたフランス」(la France organisée) (737) と形容された葬列とともに歩き続けたスチュレルは、自分の人生は「大きな泉」(la grande source) (737) のなかの「小さな波」(un petit flot) (737) にすぎないことをはっきりと認識するに至る。この「大きな泉」は、前述したハルトマンの哲学における「無意識」やユゴーの詩が喚起する超越的な「自然」に相当するものだと考えられるが、注目すべきは、ここではそれがアイデンティティのない群衆の一体性ではなく、「このフランス人の群れの一体性」(l'unité de ce pullulement de Français) (737) という具体的な国民のイメージとして捉えられていることである。

ユゴーの葬列を描写した場面では、「祖国」「国家」「フランス」「フランス人」といった語が頻出することが示すように、前夜の凱旋門の場面では見られなかった主人公のナショナリスティックな感情が顕在化している。そして、そこには凱旋門とパンテオンというまさに国家的なモニュメントが重要な役割を果たしているのである。

周知のように、凱旋門はナポレオン(Napoléon Bonaparte, 1769-1821)が、アウステルリッツの戦い(1805年)の勝利を記念して建設を命じたものであるが、『デラシネ』において、凱旋門は「外国に対してフランスが占めている重要な地位を保つ」(736) 役目があるとされる。なぜならこのモニュメントは「われわれが諸民族にフランスの思想つまり『人間の自由』を与え、送り届けたことを想起させる」(736) からである。つまり、ここで凱旋門はフランス革命の思想を各国に広めたナポレオンの栄光を喚起するモニュメントとされており、この意味において「われわれの正当な誇りのしるし」(le signe de notre

juste orgueil) (736) なのである。

これに対して、パンテオンにはより重層的な歴史的・社会的意味づけがなされている。このモニュメントの重要性は、凱旋門のように建物自体によって喚起される記憶にあるのではなく、パンテオンがあるサント＝ジュヌヴィエーヴの丘の歴史と深く結びついていることにある。

彼 [ユゴー] は偉人たちの納骨所、つまり国の心臓部であり書物が集積された場所に行く。この地で、ひとりの伝説的な少女がパリを救い、蛮族を退けた。この丘にある数々の学校が未来永劫果たすべきことは同じ任務である。それらの学校はつねにフランスに行動原理を示して国を救済しなければならない。この地で、若者たちは国の伝統を継承すると同時に、世界における真実の現状、さらなる文明化を目指して目下すべての民族が行っている努力を学ぶことになる。12世紀の最初の試み以来、われわれフランス国民が、世界に役立つことを意識し、それを世界に提供することを可能にした思想信条が生み出されてきた場所はここである。(736)

「ひとりの伝説的な少女」とは5世紀半ばにフン族の王アッチラの侵入からパリを守ったとされる聖ジュヌヴィエーヴ (Sainte Geneviève, 420頃-500頃) をさすが、こうしたナショナル・アイデンティティの起源となる記憶が刻まれたサント＝ジュヌヴィエーヴの丘は、フランスという国家のまさに聖地であるといえるだろう。さらにカルチエ・ラタンの中心に位置し、中世からパリ大学などの教育施設が集まっているこの丘は、フランスの知的活動の拠点でもある。そして、その活動の成果は世界中に伝えられており、この意味でパンテオンは「われわれの善行の実験室」(le laboratoire de notre bienfaisance) (736) とされる。バレスによると、国家の聖地に位置するパンテオンは、フランスが行ってきた世界への文化的貢献を表すモニュメントなのである。

V.

凱旋門とパンテオンに付与されたこのような象徴的性格によって、ユゴーの葬送そのものも極めてシンボリックな意味を帯びた儀式として描かれることになる。

凱旋門からパンテオンへと、万人に付き添われてヴィクトル・ユゴーは進む。彼はフランスの誇りからフランスの心臓部へと行くのだ。フランス国民は自国に引き返すものだが、彼はその国民性を体現している。彼は世界に広められた後、世界の中心に戻ってくる。そしてわれわれの伝統を形成している死者たちの群れに加わるのだ。われわれはこの詩人を彼が皇帝の賓客となった凱旋門から、沈むことのない「方舟」まで送る。そこでは、あらゆる種類の功績が思想となって、フランスのエネルギの新たな刺激となるのだ。

今後、ユゴーは国の伝統が尊重されたアララト山で眠ることになる。彼はこの避難所を高尚なものにする。彼はこの聖なる山の構成要素のひとつになるのだ。この山は、われわれの領土もしくはわれわれの精神の低い部分が蛮族に侵略されたとしても、われわれに救いをもたらしてくれることだろう。(736-737)

引用の前半では、凱旋門を媒介としてナポレオンとユゴーが結びつけられているが、バレスによると、

革命思想を周辺諸国に普及させたナポレオンのように、ヨーロッパ中で愛読されていたユゴーは「フランスの誇り」なのであり、この世界的な大詩人は最終的には母国に戻り、フランスの伝統の一部となる。そして、その伝統を具現化するのがフランスの文化的中心地に建てられたパンテオンであり、そこで知的・精神的遺産が蓄積されることによって新たな「エネルギー」が生まれるのである。

また、注目すべきは、パンテオンが「方舟」(l'Arche)つまりノアの方舟に、そしてサント＝ジュヌヴィエーヴの丘が、その方舟が漂着したとされるトルコのアララト山に喩えられていることである。それはこの丘が、「蛮族」(les Barbares)つまり外国勢力から侵略を受けた場合に、ノアの方舟にとってアララト山がそうであったように、国家にとって避難所になるという連想によるものである。言うまでもなく「蛮族」による侵略というイメージは、先述した聖ジュヌヴィエーヴの伝説と結びつくものであり、バレスの初期作品において重要なテーマでもあった。

また、カルチエ・ラタンを舞台とした第5章でもサント＝ジュヌヴィエーヴの丘がアララト山の比喩を用いて紹介されている。

死者を運ぶ川の堆積によって生まれ、学校が寄り集まったカルチエ・ラタンはアララト山のような場所、つまり、高地の避難所、国家が再建され、侵略に立ち向かう山頂のような場所だと考えるべきである。[…]

この丘に、偉大な死者に向けられるべき崇拜の試みであるパンテオンが建てられたのは素晴らしいことだ。これは中央集権化の満足すべき拠点である。至高の教壇、墓地、そして天才たちが祖国の本質を形成する。(557)

「至高の教壇」とは、カルチエ・ラタンに存在する数々の教育機関を意味すると考えられるが、ここでは「祖国の本質」を成す要素の一つとして教育の重要性が強調されており、それは第三共和政の教育に対する批判というこの小説のテーマとも結びつくものである。

指摘すべきは、教育とともに「墓地」が「祖国の本質」の一部とされていることである。そして、ユゴーの葬送の場面においても祖国という観点から死者への崇拜が称揚されている。

祖国を力の貯蔵庫という側面において考えよう。祖国にその力を発揮させよう。フランスのあらゆる偉大さは、その土地に埋葬された人々によるものであることを想起しよう。彼らを崇拜しよう。その崇拜によってわれわれの力が増すであろう。(737)

これは、バレスが1899年3月に「フランス祖国同盟」(La Ligue de la patrie française)の集会で行った演説¹²⁾で定式化されることになる「大地と死者」(la terre et les morts)のナショナリズムを予告するものだといえるだろう。いずれにせよ、『デラシネ』におけるパンテオンとは、国家的偉人の霊廟、死者を崇拜する場であるだけでなく、フランスにおける学問の中心地であり、国家のエネルギーの貯蔵庫であり、外国勢力に立ち向かう拠点であり、フランス国民の精神的支柱となる聖地なのである。

この観点から、パンテオンとアララト山との関係を再び検討してみたい。注目すべきは、小説の第4章でアスチネがスチュレルに話して聞かせるオリエントの物語の最後に、このアララト山が言及されていることである。それはアルメニア人であるアスチネの両親がエレバンに赴いた際に遠くアララト山を見た母親が感動して涙を流したという挿話であり、この山の周囲部で「アルメニア人がつねに独立のために

戦った」(552) ことが言及されている。標高5000メートルを越えるアララト山は、古代から神が住む山とされるアルメニア人の聖地であり、まさにフランス人にとってのサント＝ジュヌヴィエーヴの丘のように、アルメニア人にとっては民族の独立とアイデンティティを象徴する場所である。このように、パンテオンというモニュメントが喚起するフランス人のナショナリズムが、アルメニア人の民族主義と重ねられているのである。さらに、アララト山を媒介にして、ここでもユゴーとアスチネが結びつけられていることを指摘しておきたい。

VI.

ここまでユゴーの葬儀に集まった群衆、そして凱旋門とパンテオンというモニュメントについて検討を行ってきたが、指摘すべきは、これら二つのモニュメントが国家の記憶や土地の歴史と結びついた不動の建造物であるのと対照的に、これまで引用してきたパッセージにみられるように、群衆の描写には「波」や「川」といった流動的な水のイメージが一貫して用いられていることである。このイメージは群衆のダイナミズムを表現するとともに、群衆が水のように形態が容易に変化する、あるいは変化させうる移ろいやすい存在であることを示している。実際、通夜の場面と葬列の場面では前述のように群衆の形象が変化しており、熱狂に駆られて波のように押し寄せた群衆が、翌日には整然と秩序だった一本の川のような行列に変わるのである。

しかし、この移り変わりはユゴーという国民的詩人の両義性が反映されたものでもある。先に述べたように、スチュレルにとってユゴーは現実的には「フランスの統一と友愛を維持するために必要不可欠だと思われる唯一の人間」(709) であり、実際に凱旋門からパンテオンに向かうこの偉人の葬列がフランス国民の統一性を主人公に実感させることになる。他方でユゴーは「あらゆる存在とあらゆる事物の神秘、変化、連帯」(729) や人間や人知を超越した何ものかを喚起する神秘主義的な詩人であり、彼の詩のヴィジョンは、夜の凱旋門で熱狂的な崇拜によって無意識のレベルで一体化した群衆のイメージと結びつくのである。

指摘すべきは、『デラシネ』の「問題小説」としてのテーゼ、つまり第三共和政の教育に対する問題提起という観点から見ても、ユゴーが両義的な人物であることである。確かにこの詩人は、フランスという国家の一体性を具現化する唯一の存在として称揚されているが、他方では、パレスが批判する第三共和政の価値観の源泉となった人物のひとりであり、この政体のシンボリック的存在であった。小説の冒頭でリセの学生であったスチュレルはブテイエからユゴーの詩について学ぶが、そのブテイエは「生徒たちにとってフランスの上空にはためく最も重要な二つのイメージ、つまりヴィクトル・ユゴーと英雄的な共和国のイメージと一体化した」(499) 存在であった。このように、ユゴーはパレスが攻撃対象とする第三共和政のイデオロギーおよびその伝道者であるブテイエと明確に同一視されているのである。

また、先に指摘したように、凱旋門でのユゴーの通夜は、そのオリエント的な異教性によってアスチネのイメージと結びつけられているが、注目すべきは、このアルメニア女性が、主人公に悪影響を与えるという意味においてブテイエと同様にネガティブな登場人物として描かれていることである。つまりアスチネが語るオリエントの物語は、スチュレルを現実から引き離し、夢想と想像力の世界に引き込むが、それはブテイエの教育による「根こそぎ」に続く、もうひとつの精神的な「根こそぎ」にほかならないのである。そして、この二つの「根こそぎ」には因果関係があることが作中で示唆されている。ブテイエがリセで行ったイオニアの哲学者たちに関する授業が、「イオニアの娘」(une fille d'Ionie) (545) であるア

スチネにスチュレルが魅かれる要因となり、他方では、主人公がオリエントの夢に心を奪われたのは、プティエの教育によって根づくべき場所を失ったためであると説明されている(554)。いずれにせよユゴーは、アスチネのオリエンタリズムとプティエの共和主義イデオロギーの両者を併せ持つ二重の意味でネガティブな存在だといえる。

そして、この小説にはユゴーに対する批判が直接的に展開される場面がある。それは殺人犯として逮捕される直前に仲間内でラカドーが行ったユゴーを糾弾する講演である。イポリット・テーヌ(Hippolyte Taine, 1828-1893)の決定論に依拠するラカドーは、ユゴーが説く「友愛」(fraternité)は空虚で欺瞞に満ちた言葉であり、「他者を犠牲にして、あらゆる手段を用いて生きること」(713)がこの世界の法則であり、自然界の教訓であるとする。またラカドーは、万人に教育を施すことによって貧困や不幸を根絶するというユゴーの主張を、自分自身を判断材料として否定する。なぜならロレーヌの貧農の家に生まれたラカドーは、ユゴーの思想に沿った第三共和政の教育政策によってパリの大学に進学することができたが、その結果、都会での激しい競争に敗れて挫折し、殺人を犯すに至るからである。この意味において、ジャン・ポリが指摘するように「ユゴーはラカドーの悲惨な運命の責任者のひとり」¹³⁾なのである。

以上のように、第三共和政を批判するこの小説のロジックにおいて、ユゴーは必然的にネガティブな価値を持つ人物であり、間接的にせよ主人公らロレーヌの若者たちに悪影響を与えた存在である。こうしたユゴーの否定的な側面は物語に少なからず反映されているが、パレスの代弁者であるスチュレルがつねにこの詩人を高く評価しているため、読者の目にはあまり顕在化しない。そして、ユゴーが「神」として崇められ、フランス国民の一体性のシンボルとなった二日間の葬儀によって、彼のネガティブな要素は小説から決定的に消えることになる。この意味において、ユゴーを批判したラカドーが講演の直後に逮捕され、死刑を宣告されることは象徴的だといえるだろう。

さらに『デラシネ』においては、これまで述べてきたユゴーの両義性だけでなく、この詩人の葬儀そのものも極めて両義的である。先に述べたように、ユゴーのパンテオン葬は1870年代後半に政権の座についた穏健共和派の政治的戦略の一環であり、共和政による国民の統合を目指したものであったが、パレスが攻撃しているのは、まさにこの穏健共和派のイデオロギーであり、彼らが推進する共和主義教育であった。しかし、歴史に残る一大イベントとなったユゴーの葬儀は、その目撃者であるパレスにとって政治的イデオロギーを超越した群衆の本能的な力を体感する機会であった。そして、それは「国民的エネルギー」と名づけられるものにほかならないのである。

『国民的エネルギーの小説』三部作全体から見ると、ユゴーのパンテオン葬に集まった群衆のダイナミックな描写は、普仏戦争に敗れて弱体化したフランスを立て直すためにパレスが必要とした「国民的エネルギー」の最初の発露を示すものである。この民衆の無意識ともつながった「国民的エネルギー」は、第2巻『兵士への呼びかけ』*L'Appel au soldat* (1900)において、スチュレルが参加するジョルジュ・ブーランジェ(Georges Boulanger, 1837-1891)を旗頭とした政治運動、つまりブーランジズムとして具象化されることになる。

おわりに

『デラシネ』の刊行から約10年後の1908年3月に、エミール・ゾラ(Émile Zola, 1840-1902)のパンテオン葬に対する特別予算案の国会審議において、当時下院議員であったパレスは、ドレフュス事件で敵対したゾラを非難する演説を行うことになる。この演説においてパレスは、すでにパンテオンに祀られてい

たユゴーをゾラと対極の尊敬すべき文学者として以下のように称揚する。

ユゴーの膨大な作品群は、熱狂の巨大な発生源である。人生のいかなる時にも、われわれは炎につつまれたこの山で体を温めてきた。[...] 私はユゴーがフランスの理想主義を堂々と表現してくれたことに対して彼に感謝している。[...]

その頂が時には雲に隠れて見えなくなるとしても、彼は何世代ものフランス人を低劣さから救ってくれた。汚らわしい文学を軽蔑することを誰よりも教えてくれた人物にわれわれは敬意を表したい¹⁴⁾。

指摘すべきは、ここでバレスはユゴーの作品を山に喩えて、その高尚さとゾラの「汚らわしい文学」の「低劣さ」とを対照させていることである。先述したように『デラシネ』のユゴーの国葬の場面では、パンテオンがあるサント＝ジュヌヴィエーヴの丘が蛮族に侵略されることのない聖地とされ、トルコのアララト山に例えられていたが、この演説ではユゴー本人に対して同じような聖なる山のメタファーが用いられている。これは単なる演説のレトリックではなく、バレスにおけるユゴーのイメージの連続性を示すものであり、この詩人の神格化がさらに強まっていることが読み取れるであろう。つまり「熱狂の巨大な発生源」であり、「フランスの理想主義」を表現したユゴーは、バレスにとって「国民的エネルギー」を体現する特権的な文学者であり、崇敬の念を抱き続けた神聖な存在にほかならないのである¹⁵⁾。

注

- 1) 『デラシネ』およびバレスの小説に関しては以下のロベール・ラフォン版を使用する。Maurice Barrès, *Romans et voyages*, Robert Laffont, coll. « Bouquins », t. I, 1994. この版からの引用や参照は本文中の括弧内にページ数のみを記す。
- 2) 文学ジャンルとしての「問題小説」については以下を参照のこと。Susan Rubin Suleiman, *Le Roman à thèse ou l'autorité fictive*, Classiques Garnier, 2018 (1^{er} éd., PUF, 1983). 特に「問題小説」としての『デラシネ』の分析に関して以下を参照のこと。Ibid., p. 126-140.
- 3) 『デラシネ』におけるユゴーの葬儀に関して、バレスにおける偉人のイメージという観点から示唆的な分析を行った論文として以下がある。Claire Bompaire-Evesque, « Barrès à la recherche du grand homme », *L'Écrivain et le grand homme, Travaux de littérature*, ADIREL, t. XVIII, 2005, p. 337-353.
- 4) ユゴーの葬儀については以下を参照のこと。Anver Ben-Amos, « Les funérailles de Victor Hugo : Apothéose de l'événement spectacle », in *Les Lieux de mémoire*, t.1, *La République*, sous la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1984, p. 473-522 ; 小倉孝誠『挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる19世紀フランス 愛・恐怖・群集』、人文書院、1997年、157-187頁（第5章「ヴィクトル・ユゴーの死」）。
- 5) 王政復古期の1829年にパンテオンの設計者であるジャック＝ジェルマン・スフロ（Jacques-Germain Soufflot, 1713-1780）の遺骸がパンテオンに移されたが、これは共和国の偉人としてではなかった。パンテオン葬については以下を参照のこと。長井伸仁『歴史がつくった偉人たち：近代フランスとパンテオン』、山川出版社、2007年。
- 6) Voir François Broche, *Vie de Maurice Barrès*, Bartillat, 2012, p. 60.
- 7) アルベール・チボーデ（Albert Thibaudet, 1874-1936）が指摘しているように、『デラシネ』では、ユゴーとアスチネだけではなく、対照的な一対の登場人物や出来事を並置あるいは対比させる手法がしばしば用いられている。チボーデによると、この手法はユゴーの『レ・ミゼラブル』*Les Misérables*（1862）や『笑う

- 男』*L'Homme qui rit* (1869) から影響を受けているという。Voir Albert Thibaudet, *Trente ans de vie française II, La Vie de Maurice Barrès*, Nouvelle Revue française, 1921, p. 265-266.
- 8) バレスのオリエンタリズムについては以下を参照のこと。Ida-Marie Frandon, *L'Orient de Maurice Barrès : étude de genèse*, Genève, Droz, 1952. 特にアスチネの人物像に関しては以下を参照のこと。 *Ibid.*, p. 64-71.
 - 9) 『デラシネ』の執筆と同時期の1895年にギュスターヴ・ル・ボン (Gustave Le Bon, 1841-1930) の『群集心理』 *Psychologie des foules*が刊行されており、バレスによる群衆の描写がこの社会心理学的な著作から何らかの影響を受けた可能性がある。
 - 10) Maurice Barrès, *op.cit.*, p. 1403.
 - 11) バレスにおけるハルトマンの哲学の受容に関しては以下を参照のこと。熊谷謙介「エドゥアルド・フォン・ハルトマンとフランス象徴主義」、『ヨーロッパ研究』第8号、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツ・ヨーロッパ研究センター、2009年、83-99頁。
 - 12) この演説は以下に収録されている。Maurice Barrès, *La Terre et les morts : sur quelles réalités fonder la conscience française*, Bureaux de La Patrie française, 1899.
 - 13) Jean Borie, « Préface », in Maurice Barrès, *Les Déracinés*, Gallimard, coll. « folio », 1988, p. 36.
 - 14) *1908, Zola au Panthéon : débat parlementaire sur le transfert des cendres de Zola au Panthéon*, Éditions du Patrimoine, Centre des Monuments nationaux, 2008, p. 34.
 - 15) バレスは当時の右翼ナショナリストとしては例外的にフランス革命を肯定する立場にあり、それが彼のユゴーに対する高い評価にも反映されている。また、『デラシネ』では、ユゴーとともにナポレオンがスチュレルらロレーヌ出身の若者たちの思想や行動において重要な役割を果たしており、第8章には彼らがアンヴァリッドにあるナポレオンの墓の前に集合して議論するという有名な場面がある。バレスのナポレオン観については以下を参照のこと。Vital Rambaud, « Barrès et le “professeur d'énergie” », in *Napoléon, Stendhal et les romantiques, l'armée, la guerre, la gloire, Actes du colloque organisé par le Musée de l'Armée*, textes réunis par Michel Arrous, Eurédit, 2002, p. 321-334.

* 本稿は科学研究費補助金（課題番号19K00495）の助成を受けた研究成果の一部である。